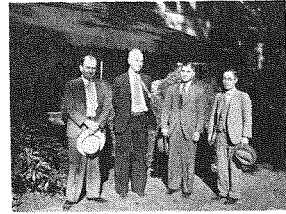


## 關門鐵道隧道工事の殉職者

# 齋藤眞平技師

(前號よりつゞく)



大正12年に清水隧道の大工事が着手せられ、齋藤氏は一介の青年技手の身を以て土合口の現場主任を命ぜられ、益々現場工事に精進してをつたのであるが、關東大震災後の帝都復興の大工事が起さるゝに及び、鐵道省より多數の技術家を起用され、齋藤氏も隅田川に劃期的大橋梁工事を擔當する釘宮所長の下に基礎潜函工事に従事する事となつた。

當時の潜函基礎工事は米國式の大規模なる機械應用の工法であつたが、齋藤氏の熱心誠實なる仕事ぶりは米人技師其他の同僚より敬愛的となつてゐた。

大正15年4月丹那隧道工事の水抜坑にシールド工法を採用するに際し、當時の擔任技師星野茂樹氏は此所に齋藤氏を再び起用して、其の精銳なる技術的手腕を發揮せしめる事となつた。而して昭和9年丹那隧道完成まで我國未曾有の世界的難工事に貢獻する處大なるものがあつた。

昭和11年下關改良事務所に於て關門海底隧道工事を着手せらるゝに當り、齋藤氏は再び釘宮所長の下に起用せられたのである。而して此所にも齋藤氏の熱心と誠實なる作業ぶりは倦む事なく、上下の信頼は益々大なるものがあつた。

齋藤氏が海底隧道のシールド工事に如何に細心の研究的態度を以て臨んでゐたかは、次の敘述を以ても知られる、而して此文章こそ恐らく齋藤氏の最後のものである。

六月十二日正午

(前略)シールドも其の後思つたより順調に進で居り、また假壁の取拂ひが完了しませんから本格的ではありませんが、假壁撤去は先づ半分は成功の確信がつかしました。

はじめ底設導坑掘進を開始したとき、壁面より40程位前方は全く完全な地山でモメた形跡はあり

ません、水を排除してゐる爲め相當堅いもので、クレードル設置の必要は認められなかつたのですが、上司の意見により約四米だけ施工する事とし、之を實施いたしました。引續き上部より鐵桁の取外しにかゝりました。前面の板のプランクは其まゝ(空氣のリークを防ぐ爲)とし、先づ三本の鐵桁撤去を昨夜やりました。そうして其の下部はシールドを一と押し押し出して撤去する事とし、今日午前シールドを進めました。前面の山留めの方法、カラムジャツキだの、フェスジャツキだの、機能や使用法を一、一實際に就いて教授するので、中々骨が折れます。今日は先づ大過なく第一回のショピングをやつたので、御神酒ものだと思つて喜んで居ります。カラムジャツキは、中々便利ではじめから施工を考へて配置したならば實に重寶なものです。シールドジャツキ其他ジャツキはバルブが思ふ様にならず閉口して居ります。小竹君も苦心して居りますが、材質が米國に及ばないものらしいので、甚だ残念です。シールドのショブも時間を永くかけて一と押し、何回かに分けて左右上下各寸法を整齊し乍らやるとうまく行く様です、本場のを見た事は何よりの勉強です、今の處心配もありませんが楽しみます。

クレードル施工の時(根掘)だけ、二五ホンドに氣壓を上げましたが、二一ホンドでは底部から少々水が出ますが坑導の下部だけです。前のプランクを取る時は一八ホンド位に(シールドの中心のヘッド)下げる豫定です。

鐵桁の切斷はアセチリン酸素を使用して居ります。一酸化炭素發生を心配しましたが、今の處大した事はない様です。壓氣機は四百馬力が約三分の一だけ働いて居ります。

以上最近の模様を取急ぎ御知させていただきます。

以上も星野氏宛のものであるが、之丈け工事熱心な手紙を書く人も稀であるが、亦之丈け詳細な工事手紙を喜んで讀む人も少いと思はれる。

齋藤氏殉職の報を聞いて愕然として悲痛の

感に耐へなかつた星野氏は告別式に臨んで次の弔辭を讀んでゐる。

#### 弔 詞

齋藤君

君が例の達筆で、いつもの歯切れのよい調子で、シールド工事がどうやらうまく行き相だと、如何にも樂し相な手紙を下さつたのは、六月十二日でした。私も成る可く早く拜見に来て、君から種々の苦勞話を伺ふのを楽しみにして居ました處、一昨夜君がトンネル内で怪我をされて、永眠されたと伺ひ、二十年來の大事な友を遂に失つたと知り、残念とも何とも申し上げ様のない気分になりました。私は君が又いつもの仕事熱心から、今度の工事で過勞にて病氣になりはしないかと心配で、このトンネルに拜見に来る毎に、君の様子をしばらくじつと見て居ました。所が三月のトンネル會議で御目に懸つた時は、大變元氣な様子を見、同年の私の體力に比較し、如何にも輕々と動作されるので安心しました。日本でのシールド工事の要領を體得されて、種々經驗話が伺へると楽しみにして居ました。君が朗かで、頭が良く、仕事に忠實で、落ちのなのは私が始終感心して居た所です。たまたま出た學校の良いばかりに、私が何時も上に居て君と一緒に働いては御面倒な仕事の實行をして戴き、私は何時も樂に働け大變幸を得ました。

顧ますと、君は清水トンネル、永代橋ケーソン工事、丹那トンネルと、何時も土木工事の先端を行く困難な仕事の衝に當り、而も立派に是等の仕事を完成され、今又關門トンネルのシールド工事を擔當され着々その手腕を發揮して居られたのでした。處が不幸殉職され、今や君と共に語る機會は失はれてしまいました。遺つた御家族や、私共にとりましては誠に残念に存じますが、自分の魂を打込んだ仕事に瘞れられた事は、軍人の戦死にも等しい立派な事だと思ひます。

謹みて御冥福を祈ります。

昭和十四年六月二十七日

鐵道省熱海建設事務所長

星 野 茂 樹

尚ほ齋藤氏の告別式に際しては堀越建設局長其他からも町重なる弔辭を呈せられ、一方には元鐵道次官久保田敬一博士からも絶讃の

追悼文を發表された。また釘宮所長其他の盡力により鐵道省建設關係各先輩の發起を以て、齋藤氏遺族の教育資金を募集されつゝある等、工事技術界稀に見る美譽と言ふべきである。

尙最後に齋藤氏の同僚小竹秀雄氏の思出を語る一文を録して、齋藤氏の工事態度を傳ふるの一端としたい。

關門トンネルの仕事が初められると言ふので、此の工事計畫の下準備が本省建設局で初められ、齋藤さんが本省に出張したのは昭和十二年の四月頃だつたと思ひます。一ヶ月位で色々な準備も進みまして、一度熱海へ引き上げました。七月十五日下關改良事務所が出来まして齋藤さんが轉勤して來られたのは八月十二日でした。齋藤さんが隧道課の工事掛長として活動され出したのは此れからです。何しろ事務所は開かれては居たものの、建設、工務、鐵道局と各所から集つたものだから、在來の慣習もあり、現在の様な制度が出来るまでには相當苦勞したものでした。齋藤さんは此の中にあつて隧道工事の計畫設計に、事務上の規定の制定に連日打合せに、會議に、並々ならぬ苦勞をされて居ました。それでも明晰な頭でてきげきと處理され、つかれた様子も見せませんでしたあの温顔が今でもまぶたの底に残つて居ます。部下の面倒をよく見て下さる事は吾が子の様でしたので、若い者の信頼も又格別でした。

昭和十三年五月本隧道工事の最難關と想像せらるる門司側の花崗石風化帯に應用せらるるシールド工法研究の爲め所長に隨行して米國に出張を命ぜられ、主任會議の席上から急遽上京し、米國に出張のため横濱を出帆したのは六月一日でした。六月二十一日サンフランシスコ經由ニューヨークにつきまして直ちに工事の勉強に取掛りました。齋藤さんがいつもの調子で吾々の氣付かない様な細い事にも注意の目をみはり、達筆で毎日毎日細大もらさず書留めて居るのには感心しました。在米三ヶ月は完全無缺に等しい齋藤さんに、より以上の仕上の光明を與へました。

九月二十八日下關に歸つて参りましてからの齋藤さんは、工事着手前の最後の計畫に席の温るひまもありませんでした。

暮もせまつた十一月十二日シールドの組立が初

まるので、門司側在勤を命ぜられました。

それからシールド工事の開始せらるる本年六月六日まで、約七ヶ月間シールドの組立に装備に、あの足場の悪い深さ二十米近くもある堅坑の中に毎日毎日十回近くも上下して居ました。六月七日シールド工事は開始されました。監督者初め、労働者に到るまでシールド工事については全く見たり聞いたりした事もないすぶの素人です、而も晝夜三交代で初められましたので、齋藤さんの苦勞は今迄でも相当だったのに、その二倍にも三倍にもなりました、兵士が戦場へ出た様なものです、赤ちやんにあんよを教へるそれにも似てゐます、父母の喜びと苦勞を思ひ出して下さい、全くおつとめでは出来る仕事ではありません。朝は六時半には出勤してゐました、晝の中六七時間壓搾空氣にもぐつてゐます、夕方歸るのは何時も六時頃です、まだなれませんのでシールドのショープが大抵夜十一時の交代時か朝の三時頃でした、夜の十一時頃ですと、午後六時に歸りますと家で夕食をすまし、風呂に入つて九時半頃出かけます、それから三時間位又壓搾空氣に入つてシールドをショープして出て家に歸り、床に入るのは十二時半か一時です。それでも仕事は心配なものですから、朝六時四十分位には出勤して、もう坑内に入つて行きます。朝三時頃押す日は午前三時に出来て、朝七時頃ショープを終つて坑内から出て来ます、そして一時間程で家で朝食をすまして、又お役所に出て、お晝前十時前後に又坑内に入ります。

こんな風ですから、一日の入働も十時間を下る事は少い有様でした、こうした日が殆んど毎日毎日續けられました。こんな日が二十日程續きましたので漸くシールドの押し方、セグメントの組立方、支保工の仕方、堀鑿の順序、即ちシールドはこんな具合にやるのかと言ふ事を呑み込まず事が出来ました。二十三日金曜日でした、もう大體仕事も分つた様だし身體もつかれたので、明日の土曜は公休だから休むよと言われました。私も大分つかれてゐましたし、私は翌々日の日曜が休みでしたので、私も日曜休まして戴きますから休ませうと言ひましたら、土曜日は休まれました。

二十五日はほんとに悪い日でした、此の日シールドは丁度午後三時の交代時に押す事に成つて居ましたので、齋藤さんは午後二時半頃入坑されてシールドのショープをすませ、これからセグ

メントを組むと言ふ段取まで命じ、午後六時鐵梯子を昇つて坑外に出るべくシャフトの下まで昇られて来た處でした、丁度セグメントが降りて来てロツクの中にあると言ふので、上に居たかいしゃくの人夫が、誰か人が昇つて来たと言ふので、聲であぶないと叫びました。

齋藤さんもセグメントが下る時期だと直感して、身體を安全地帯に引込めると同時でした、どんなばづみでしたか、手が離れたのか、足をすべらしたか高さ十一米の所から板張の床の上まで落ちたのでした。直ちに救出救護所で假手當の上、門鐵病院に入れまして、出来る丈けの手當をしました。醫者も案外輕そうな事を言つてゐましたし、本人も元氣でしたのでまさか死ぬなんて言ふ事は夢にも思ひませんでした。死なれる數分前私の聞いた言葉は「クタボレテ居タノデナー」と言われた事でした。今も此の言葉が私の頭の底にこびりついて居ます、ほんとに職にたふれた清いすがたでした。(終)

(193頁)寫眞はニューヨーク市水道技師ハワード  
氏の邸にて左端は齋藤眞平氏。

(下の寫眞)ホノルルに着した船上の一行

